

もしふえあ！

ヒヨロヒヨロ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もし「フェアリー・エフェクト」の世界に、全ての至高の御方々が降臨したら？

拙作「フェアリー・エフェクト」の蛇足なので、そつちを先に読まないで「???」ってなりますが、あつちははあれで完結しています。

タイトルの通り「もしも」や「もしかしたら」なネタでしかありませんので、解釈違いが発生したら「これはIFルート」と唱えて忘れて下さい。

貴方の脳内にあるアフターストーリーこそフェアエフェ正規続編。

「お前の全てを許そう」という方のみ、どうぞお読みください。

目次

七つまでは神のうち	1
死は前世の業を禊ぐ	5
病める時も健やかなる時も	11

七つまでは神のうち

モモンガは悩んでいた。

自身の正后——否、その呼び方はさも妾妃を娶る前提のようで意に沿わぬ為、あえてただこう呼ぼう——妻となってくれた、アルベド。彼女との間に授かった我が子、その命名についてである。

モモンガは、己のネーミングセンスは壊滅的であると、既に自覚はしている。

それは、自分では良いと思った提案が、周囲からひきつった笑みを返される結果となる、という経験に基づく自覚であり——肝心のセンス自体は改善されていない。というか、どうすれば改善するのかわからない。急募：センス。

しかし、アルベドが「この子には、どうかモモンガ様から名を賜りたく」と、大きくなった胎を撫でて言うのだ。その願いを無下にする事など、モモンガにはできない。というか、したくない。

かといって、変な名前をつけてしまって、我が子が笑い物になるような未来も御免被る。

とすれば、誰かに相談しながら考えるしかないが、ナザリックのシモベ相手だと至高の御方全肯定して相談の意味がなさそうだし、現地スカウト勢相手だとただのパワハラにしかない気がする。

同じプレイヤー仲間相談するしても——へロへロは「奥さんとお子さんについて下さい！」と、モモンガがするべきナザリック責任者としての決済を代行してくれているので、これ以上負担をかけるのは気が引ける。

という訳で、情けなくも十代の少女に継る羽目となったモモンガであったが、結果としてそれは大正解だった。

「名前、名前……う、うくん——あ！ 私のお祖母ちゃん、〃百の恵み〃と書いて〃モモエ〃って名前だったんです。モモンガさんの〃モモ〃を〃百〃の意味に準えて、漢数字に絡んだ名前とかどうでしょう？」

「なるほど、漢数字……私が百なら、それより上の桁の〃千〃とか——

「——
ルイの言葉から連想したことを呟いて——途端、モモンガの脳裏に蘇る記憶。

——かつてギルメンたちと鑑賞した古いアニメ。百年経っても名作とされる、その映画のタイトル。

「——『贅沢な名前』だ!!!」

閃いたままに、そう叫んで——突然の大声に飛び上がったルイに、慌てて謝り倒す羽目となった。

——主人公の少女が迷い込んだ神々の湯治場。そこを統べる魔女は、少女の名を聞くなり、名の一部を取り上げてしまった。

何でこれが『贅沢な名』なんでしよう?——魔女の台詞に首を傾げた己に、隣にいたタブラ・スマラグディナが、丁寧^{テイナ}にその意味を説明してくれた。

博識な脳喰^{ブレイン・イーター}い曰く——

——『千』の字には、単純に数字としての1000に限らず、『数え切れないほど多くのもの』という意味があり、つまりは『際限なく』『無限に』という意味を持つのです。

そして、『尋』という字は『たずねる』と読みます。それは即ち『探求』の意であり、またそれによつてたどり着く真理にも繋がるのです。

この二つを重ねた名は、つまり『果てなき探求者』、『森羅万象を知り得る者』という意味を持つのですよ——

当時のモモンガは、「なるほど、それは『贅沢』だ」と心底納得したものだ。

(——男女どつちでもしっくりくるし、うん、いい名前じゃないかー)
『森羅万象を知れ』とまでは言わないが、どうか『果てなき探求者』^学_び^続_{ける}であれ——そんな祈りを込めて、この名を贈ろう。

アルベドは、種族的なものなのか、個人の資質なのか、全く危うげもなく出産を終えた。

すっかり母の顔となった彼女の腕の中。そこに収まった我が子の手に、モモンガはおそるおそる触れる。

途端、きゅつと指先を握られて——胸に溢れる万感の想い。

(ああ——この子が、俺の子)

なんと——なんと愛おしいのか！

(アルベド、ありがとう——)

新たな家族をくれた妻への、圧倒的な感謝の念。

(ああ、お前の創造者にも、一目でいいから、この子を抱くお前の姿を、見せてやりたい)

そんな、叶わぬ願いすら、浮かんでくる。

(タブラさんだけじゃなく、皆にも——何より、今のナザリックのNPCたちを、ギルメンに会わせてやりたい)

度々重いとすら感じられたNPCたちの敬愛——ああ、今の自分ならわかる。仕方ないよな、抑えられないよな。

(子を想う親の愛が無限なんだ——逆だっつてそうだよなあ、みんな) 際限なく、止めようもなく、溢れてくるのだから。

「——千尋、生まれてきてくれて、ありがとう」

言葉にしきれない想いを、ただその名に込めて呼んだ。

——その瞬間、いかなる原理でもって、その奇跡が成されたのか、誰にもわからない。

父が持つ世界級アイテムや、タレントとして得た始原の魔法の力が、何らかの形で子に異能を与えたのでは、と後々推察されたが、その是非を確かめる術は終ぞ見つからなかった。

ただ、目に見える結果としては、モモンガに名を呼ばれた子が、その身から眩い光を発し——ナザリックの円卓の間に、既にいるモモンガとヘロヘロ以外の、39人のギルメンが召喚された。

それが、ナザリックの住人が40人増えた、〃御子の奇跡の日〃の全てなのだ。

「〃御子の奇跡〃ってか、むしろ〃坊な千尋の神隠し〃」

「言い得て妙かよ」

「魔女も真つ青なモンペ（複数）持ち」

「やばいですね」

「まあ、俺らもそのモンペの一部なんですけどー」

「文字通り異形種モンスターペアレント」

「おいモンスター言うな」

「人間形態になれる仕様がついててくれてよかったよね」

「姉ちゃんは特にね！」

「黙れ愚弟」

「ひえっ」

下らない——けれど掛け替えのない、そんなやりとりが再び日常になった、始まりのお話。

死は前世の業を禊ぐ

再会したギルメンたちとは、最初まともな会話にならなかった。

ヘロヘロは、モモンガと共に、ギルメンたちが見慣れているだろう異形種^{アバター}姿の方で顔を出したのだが、

「モモンガさんっ!? 生きてたの!?!」

「いや、むしろ死んでる!?!」

「ヘロヘロさんも……すっかり腐敗して……」

「ううっ……原型もない……」

「夢でも会えて嬉しいよおおお! 最終日いけなくてゴメンねえええ!」

「こんな風に化けて出るほど、無念だったんだ……当然だよね……」

「仇は絶対とりますから! ユグドラシル・シヨック”の真相を暴いて、あのクソ企業どもに償わせますから!」

「いや、化けて出た訳でも、夢でもないです!」

「つていうか、仇つて何!?! ユグドラシル・シヨック”とは!?!」

まずは、お互いの状況をすり合わせるための、情報交換が必要だった。

「それなんてラノベ?」

「それな」

「ふむ、事実は小説より奇なり、と。面白いですね」

「タブラさん、順応早すぎない?」

「いうて、まあ、俺らも信じてない訳じゃないけど」

「こっちで把握してる情報と齟齬がないから、否定できる要素がないですしおすし」

「まさか”ユグドラシル・シヨック”の真相が、”異世界転移”だったとは」

モモンガとヘロヘロの説明を聞いた後、意外にもギルメンたちから疑う言葉は出てこなかった。

それは、《リアル》側のギルメンたちが把握していた情報故。

ヘロヘロ自身、薄々予想はしていたが——ユグドラシル終了と同時に《異世界》へゲームアバターで転移した自分たちは、《リアル》の肉体が死亡してしまっただけなのだ。

まあ、意識というか魂というか、そういうものがまるっと抜き取られてしまったのだから、それは当然の帰結ともいえる。

ヘロヘロたちだけでなく、サービス終了までログインしていたプレイヤーの一部が、同様に変死したらしい。——正確な数は不明だが、少なくとも三桁はいる、という話だった。

企業側は隠蔽しようとしたが、人の口に戸は立てられない。集団変死とユグドラシルに何らかの因果関係があるらしいことは、瞬く間に世間に広まり、「ユグドラシル・ショック」と呼ばれる一大スキャンダルとなったのだという。

「噂聞いて、不安になって、ギルメン内で連絡回したら、案の定音信不通の面々がいて」

「でも、転移してたのはモモンガさんとヘロヘロさんだけなんだ？」

「連絡取れないの、他にも何人かいたよな？」

「たっち・みーさんと、ウルベルトさんと、ベルリバーさんですね」

ぶにつと萌えがさらつと名を上げ、三人に注目が集まる。

「なんで連絡取れなかったんだよ！ 特にたっちさん！ 現役警察官をアテにしていたのに！」

「それは……すみませんでした」

ぶーぶーと文句を言いながら纏わりつくピンクのスライムに、たっち・みーは困ったような声音で謝り、

「……最終日、勤務でおそらくログインできないと、モモンガさんにはお知らせしたと思うんですけど……」

「あ……はい」

「夜に緊急出動があつて……深手を負いまして」
「えっ!？」

驚愕に、あちこちから変な声上がる。

「即死こそしませんでした、あれは確実に致命傷でした。——実際、気がついたらここにいたので、《リアル》の身体はあのまま死んだので

しよう」

「たち・みーのまさかの告白に、「まさかの別口死亡……」とぶくぶく茶釜が床に伸びた。

「……まさか、とは、思うけど……二人も……？」

「——死因は言わんぞで、我ながらクソダサイ死に方したからな」

「私は……まあ、社会の闇を知りすぎて口封じされた感じですかね……」

「ひええ……」

ウルベルトとベルリバーの返答に、ペロロンチーノが白目をむく。

何とも言えない重たい沈黙を破ったのは、タブラだった。

「——ふむ。盟友の不幸な最期に思うところは勿論ありますが、今の話を聞いて、私はむしろ安心しました」

「え、今の話に安心要素あった??？」

るし☆ふぁー
超問題児のツツコミ。レアである。

「ええ——我ら『アインズ・ウール・ゴウン』のメンバーに、己の意志で盟友との繋がりを断絶した者などいなかった。我らを隔て得たのは『死』だけであり、その『死』の断絶すら、今この場での再会でもって覆されたのです。——これを慶ばしいといわず、何というのでしょうか？」

誰もが一瞬きよとんとし——じわじわと、その言葉が一同の脳裏に染み込んでいく。

「……物は言い様」

「ちゆうに的ポジティブシンキング」

「さすタブ」

「そこに痺れる！」

「憧れぬ〜！」

「憧れないんかい！」

「お約束！」

ブランクなど感じさせない息のあった掛け合いに、へろへろは笑う。

（——ああ……そうだ。これが、私たちだ）

おふぎけ上等、悪ノリ大好き、逆境を逆手にとって娯楽とする大人
げない大人の集まり——ギルド「アインズ・ウール・ゴウン」。

(——って、そうだ、ルイさんのことを紹介しないと)
そんな「アインズ・ウール・ゴウン」の集大成ナザリックに憧れて、特攻して
きた少女のことを思い出す。

「皆さん、実はもう一人プレイヤーと一緒に転移してて……」

「——あ、最終日にいた妖精の子？ モモンガさんの嫁だっけ？」

「いや私じゃなくて、私のNPCの嫁です！ 怖い間違いヤメテ！」

ギルメンの一人があげた声に、モモンガが悲鳴のように訂正する。

——そういえば、あの日へロへロの前にログインしたメンバーとも、
ルイは会っているのか。

取りあえず、会ったことがないメンバーの方が圧倒的に多いので、
互いに挨拶しようとルイを《伝言》メッセージで呼び——

「——はじめまして、ルイと言います！」

「えっ……待つて待つて、ちよつと待つて！」

人間モードで自己紹介するルイに、ホワイトブリムが悲鳴のような
声をあげた。

「——まさか、トミノ ルイさん？ TMN出版の社長令嬢の？」

「……どこかでお会いしたことが……？」

不思議そうなルイの言葉は、そのまま肯定だった。

「……直接会ったことはないですが……私、御社でお世話になってい
た漫画家のホワイトブリムと申します」

途端、ルイの表情が曇った。

「それは……うちの会社が傾いて……何かご迷惑をおかけしたのでは
……？」

いえ、とホワイトブリムは頭を振る。

「TMN出版は……大手の傘下にうまく入って、持ち直しましたから」
「そうなんですか!! ——ああ、よかったあ……」

心底安堵したように、ルイは笑った。

「……私が義務を放り出したことで、会社の関係者の皆さんに迷惑か
かってたらどうしようって、気になってたんです。——その癖、帰ろ

うともしなかったんですから、すごく無責任で勝手なんですけど」
(……政略結婚から逃げたことを、実はずっと気に病んでいたのか……)

へロへロ的には「親より年上の子持ちのおっさんが相手とか、そりや逃げるわ」としか思ってたが——この優しい子が、大勢の人生に影響が出るかも知れない選択を、その行く末を、気にしない訳がない。

ルイの性格的に、自身が幸福になればなるほど、後ろめたさは余計に増しただろう——ホワイトブリムを介して、会社のその後が知れてよかった。

「——よかったですね、ルイさん」

「はいー」

モモンガの柔らかな声に、頷くルイの朗らかな笑み。——この笑みが曇らぬように、これ以上の情報は要らない。

「——あの……」

物言いたげなホワイトブリムに、へロへロは魔法を送る。

『《伝言》^{メッセージ}です。——ルイさんに聞こえないように』

『……察してます?』

『自分より年上のおっさんと政略結婚させようとするくらい、よろしくない親だつてのは聞いてましたから』

『ああ、その噂もマジだったのか…… “自殺”として処理するための後付けじゃなかったんだな……』

『——表向きには、“政略結婚を厭つての自殺”?』

『ええ。“ユグドラシル・ショック”なんてない”つてのが、公の見解ですからね』

——《リアル》の彼女は、“ユグドラシル・ショック”で死亡した。彼女の親は会社を立て直したくて、企業側は彼女の“死”の理由を隠蔽したかった。——利害の一致、そういうことだ。

そんな反吐が出るようなやり口が当たり前だったのだ、《あの世界》^{リア}は。

あらゆる意味で腐っていて、まともな人ほど損をするような、終

わっていた世界。

(——でも、もう、私たちには関係ない)

清々しいほどぼつさりと、へろへろは《リアル》についての諸々を切り捨てる。

魔法を切つて、ホワイトブリンム 同好の士へ明るい声で語りかけた。

「——ここは楽園ですよ、ホワイトブリンムさん！ 水も空気も食事も美味しくて、何より理想のメイドたちが生きてるんです！」

「……なん、だと……!? そうか、NPCが生きてるって、そういうことになるのか！」

「え、まって、待って？ うちの子も？」

「俺の最高傑作もか!？」

興奮したように食いついてくるギルメンたち。

——自分たちは、このすばらしい世界で、生きていくだけだ。

病める時も健やかなる時も

ペロ「シャルティアと結婚式する〜！」

タブ「私に、娘の晴れ姿を見せない気ですか？」

茶釜「ウエディングドレスは乙女の夢だよ、ルイちゃんにも着せない〜！」

つてな流れで、モモアル、ペロシャル、パンルイの合同結婚式することに

結婚式を控えて、パンドラが告げていなかったことをルイに打ち明ける

パン「以前、私は身体的には無性だとお話しましたが」

ルイ「？」

パン「実は、あれは半分嘘なのです」

ルイ「えっ」

パン「外装を使用している時は、性別もそれに倣うのです」

ルイ「……え、えつと……？」

パン「“アクト”の時は、完全に“人間の男”になります」

ルイ「ああ、そういう……えっ？」

パン「ただ、私の場合、“^{外装}身体に^{感情}精神が引つ張られる”ことなど、種族的に考えてないはずなのです」

ルイ「……そうなんですか？」

パン「外装を自由に変えられることが強みの種族ですから、それで振り回されては意味がありません。実際、最初に“アクト”で人里に赴いた時は、外装と同じ種族^{ニンゲン}に対して、特別な情が湧くようなことは一切ありませんでした」

ルイ「なるほど」

パン「ですが、ルイ殿とのデートの時は違いました」

ルイ「えっ？」

パン「貴女の一挙一動で心が揺れ動き、この手は貴女に触れようと、視線は貴女の笑顔に釘付けでした」

ルイ「は、はわわ……」赤面

パン「そうして、私は自覚したのです。私は男として、女性としての貴女を、愛しているのだと」

ルイ（赤面して硬直）

パン「……貴女が、男としての私を受け入れられないというならば、私はこの心を封印します。決して、貴女に無理に触れたりはしません」

ルイ「えっ……」

パン「ただ、夫としての座を、誰かに譲ることだけは、できかねます。……一番近い『家族』として、貴女を慈しむことだけは、どうか許して下さい」

ルイ「……………あの」

パン「はい」

ルイ「……私も……パンドラさんが、別の人をお嫁さんにしたら、嫌だなんて……」

パン「えっ」

ルイ「……その、ふ、触れる、とかも……パンドラさん、なら……」

パン「……」

ルイ「……パンドラさん以外は、嫌です……」

パン（尊み頭部ブリッジのポーズ）

そんな感じで、結婚式で初ちゅーからの新婚初夜ルートなパンルイ

（パンルイ設定）

パンドラがルイに向けてる愛は、実はメタクソ重いです。自覚無いけど。

というのは、パンドラにとって、ルイは「成功体験」そのものだから。

モモンガ様の役に立ちたいと願いながらも、宝物殿の一オブジェと化していた彼。そこに、ルイをきっかけとして書き加えられた「モモンガの息子にして、ルイの夫」という【設定】。

これはパンドラにとって「モモンガに必要な人をつなぎ止める楔」として使ってもらえたという、唯一にして絶対的な成功体験。

なので、ルイに対する執着は相当ヤバいのです。パンドラ無自覚だけど。

一方、ルイの方がパンドラに向ける感情は、普通に少女の恋です。優しくて頼りになる先輩に恋しちゃった的な。顔は埴輪だけど。

実はパンドラの方が無意識にルイの理想を読んで演じてた部分もあり、ルイがパンドラに惹かれるのは当然の帰結。

ぶっちゃけ、困ってる方にも困われてる方にも自覚がない、ラナー&クライムの上位互換（完成系）。

この関係性を、うまく小説として書き上げられなかったが故の台本形式です。

パンドラ視点でもルイ視点でも完全三人称でも迷走……表現力が、伝達力が足りない……

なお、名実ともにちゃんと夫婦になったので、ルイの心身が脅かされない限り、パンドラのヤンデレスイッチは入りません。

やったね、ハッピーエンド!!!